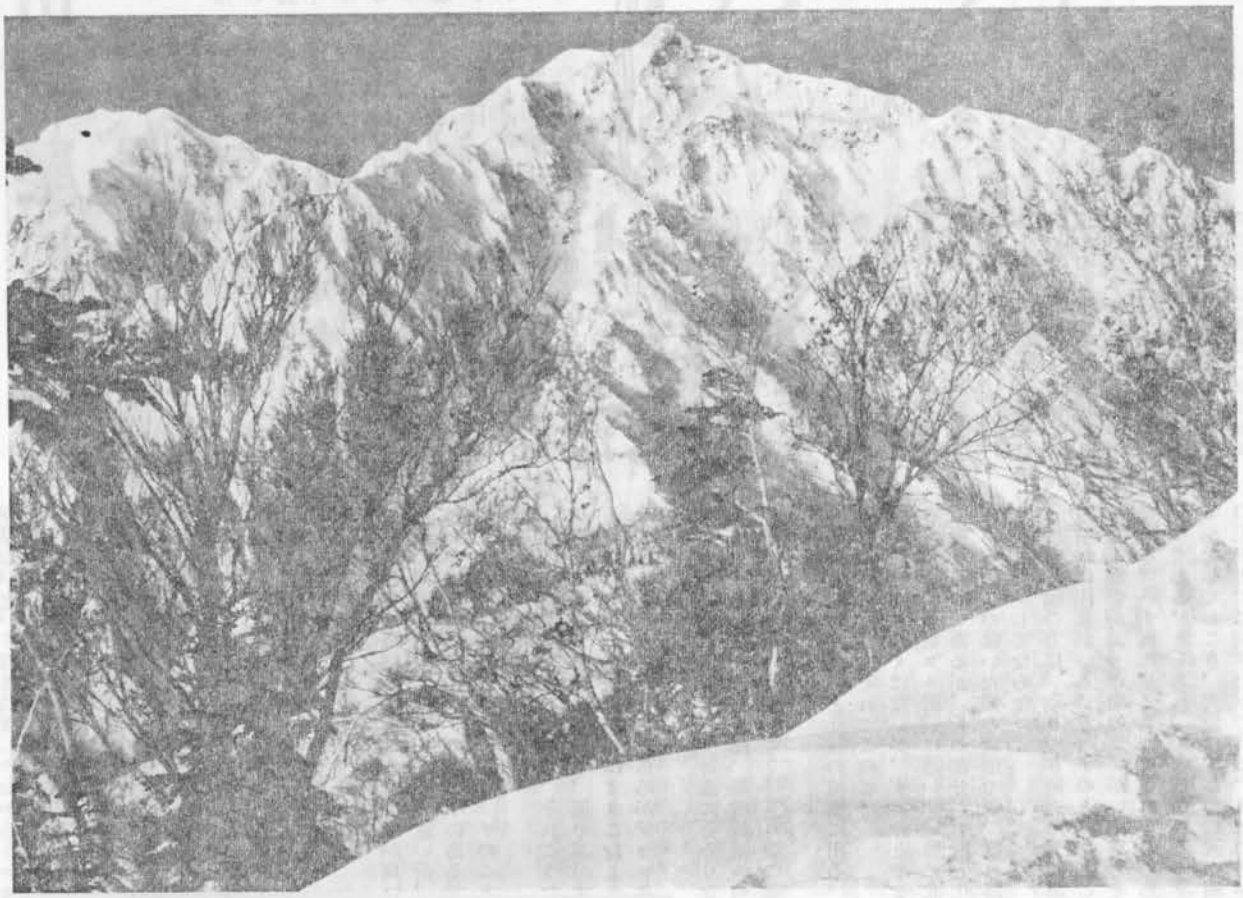
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第12巻　第1号　1967年1月25日　大町山岳博物館



雪山のモラル

この正月もまた冬山の遭難が各地で続発してしまった。「正月の山は荒れる。登山は見合わせてほしい」と関係各方面で口のすくなる程警告を繰返したにもかゝわらず史上最高の犠牲者を出す結果となったことは山岳関係者にとって大きなショックであろう。それにしても今年はひどすぎた…件数の多かったこともさることながらその内容のお粗末さにはあ然とさせられる。たしかに「立派な遭難」などというものはあり得ないがそれでも何かそこに同情を誘う要因を持っていたように思うしかし今度の或る遭難パーティーのように富山県と登山届出計画の変更問題で派手に論争したあげく結果的には嘘偽の計画変更をして入山許可をとりつけ地元をあざむいて最初の計画を強行し遭難…という全く同情の余地がないばかりか神聖な山の信義を平気で裏切った行為には、やり切れないと言うか情なくさえなってくる。このような山のモラルが無視される傾向は外にもある。例えば昨秋、冬山のために前穂高の最低コルに荷揚げしておいた食糧や燃料がごっそり盗まれていたり、谷川岳の二重遭難も直接原因はマチガ沢の避難小舎が心ない登山者によって荒されていたためだと言われている。以前はデポーしたスキーや置荷がなくなるなど想像すらしなかったし小舎の窓や床板を燃やす不心得者は見当らなかった…何しろそれは直接致命的な結果につながるからであり、間接的な殺人行為だからである。こうなれば最早、登山以前の問題で山男の倫理感の再教育というようなものが必要ではなかろうかとさえ思われる。五百万人と言われる登山人口を二頭立ての馬車的日本山岳協会が現在のままで指導、統制し得るだろうか、いさゝか疑問も湧くが実質的な一本化を計り世間から投げられた「最低のスポーツ」のそしりを拭うべく登山計画なども協会の権威ある機関で審査し、チェックすれば暴走登山も防げるし、又長野山岳協が提案したようにリーダーの資格は協会指導員でなければ認めぬ方法をとれば前述の不良パーティーは根絶すると思う。

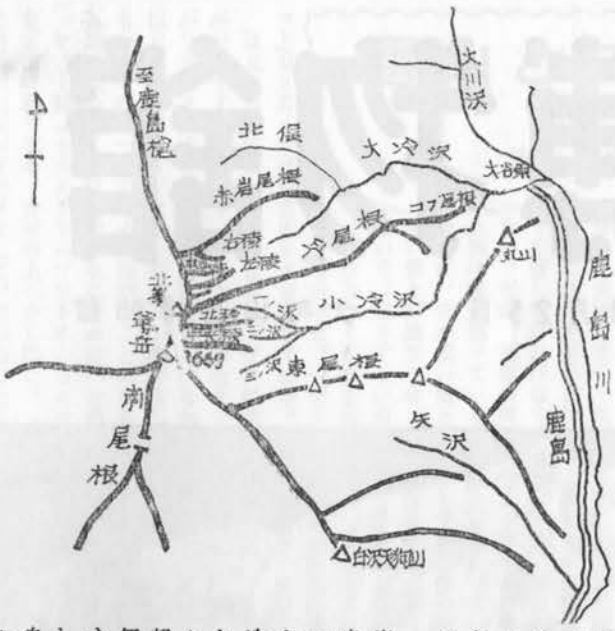
（福島　融）

越年登山　爺ガ岳冷尾根

柳沢昭夫

はじめに

この冷尾根の記録は、いわゆる記録ではないかも知れない。私ひとりの記録に過ぎない冷尾根の説明もタイムもない。だが私の足跡を記るしたい。何を求あて、どの様にして斗って、何を得たのか、それをしるしたい。だから冷尾根や東面がどの様であるのか、山の会として、それをどの様に計画し準備したのかもわからない。記録かもしれぬが、つたない筆をとおして冬の爺ガ岳がわかってほしいと思うと同時に人間くさい爺ガ岳を感じていただければ幸いと思う。



冬のある日に

冬山、そう、幾つの日からかしれない。いや、人の知らない深いため息かも知れない。自己の可能性をかたむけた、かぎりなき憧れの日からの、再びめぐり来し、冬山に、静かに淡くけむる爺ガ岳に憧れ秘めて想う。

十二月二十九日(晴れ)

昨夜は、パッキングの始めるのがおそかった。とにかく眠い。明るいユーモアのあふれるデカイホラをふきあげるもの、肩が痛いの頭が重いのと自分の調子の伏線をひくもの、世間のわずらわしさからはなれ、自分達の仲間といる喜びと、スタート前のときめきにも似た、不安と憧れを深く沈めて…。

うまく運転手をおだてて出来るかぎり鹿島部落より奥へ入る。大谷原地点からラッセルが始まる。小冷沢を川へ入ったり渡ったり、冷尾根の急な取りつき地点から深いラッセル。ふとった末端からやせた上部へとラッセルがきつい。何かの記録に処女雪にしるすラッセルの楽しさがかかれていたのが頭に浮かぶ。自問自答してみる「ラッセルは楽しいか」と、そして口に出して言う「ラッセルが楽しいという奴は馬鹿じゃなかろうか」と。ついにジャンクションピークのベースキャンプ予定地点まではいれなかった。あと一～二kmのブナやハンノ木の森林地帯にテントを設営…。天候と今日のラッセルピッチを考えながら内田リーダーと二人で、テントと食糧のデポをかねて、トレースをつけにゆく。ジャンクションピークの少し下の大岩の下にデポ。夕刻まで吹いていた風もない。空がすみれ色に濃くなる。

十二月三十日(晴)

八時出発。高気圧におゝわれ天気が良い。尾根の傾斜がまし、やせてくる。重い荷、きついラッセル。リーダーの頭の中にあるであろうと思う、昨日のラッセルピッチのことを考えると頑張らざるをえない。

明るい冗談をとばしながら、それこうたい。やせた尾根。雪が落ちてて、笹やぶがすべる。やせて来た尾根を左側にまきこむようにして登ると、とびだしたところがジャンクションピークだった。

視界が一気に広くなる。対面にそそり立つ鹿島槍、そして爺ガ岳東面、県境稜線からふきあがる雪煙が、太陽をうけて青空に美しい。

午后2時、冷尾根と北稜の偵察に出る。渡辺さん、宮沢さんそれにこの私。

冷尾根はきつくはないが、ずい分とやせてゆく。特に最低コル附近は悪い。最后に北稜に接するのであるが、その部分が雪壁と化している。この乾いた雪の状態では、崩れ落ちそうな気がしてならない。

一方北稜の方は、取りつき附近の、傾斜と雪崩れに注意がいる。リッヂのところどころにある雪をかぶった岩のコブがいやらしそうである。いずれにせよラッセルに苦しめられそうである。ともあれ、できるかぎりのラッセルをしておこう、天候は、この晴天が明日の正午までは続きそうである。気圧の谷が近ずくためか、風もなく、タンネの緑が青空に美しい。

から身のラッセルはスピードがある。パッサ〳〵と北稜に接する雪壁の少し手前までゆく。渡辺さんの冷尾根の経験では、この壁が悪いらしい。左手にトラバースして、直登することになりそうである。そのトラバースが悪そうである。

午后六時帰幕。

夜、明日の北稜及び冷尾根のアタック決定、メンバーが発表される。私は、内田、千々岩、両君とともに、北稜ゆきとなった。

十二月三十一日(晴れのち雪)

午前二時半起床、眠い。月が美しい。昨夜ははラーメンのためか腹がすいている。たべられるだけ雑煮をたべる。五時出発、月明りを利用してキャプライトをつけずに歩るく、最低コルの少し手前から、広い急な斜面のやや尾根らしいところを直に下る。途中から夜が明ける。北稜の末端から取りつかずに支稜の側面のルンゼから取りつくことにする。暗い崩れそうなルンゼをぬけでてほっとする。ルンゼはいつでもいやな感じだ。支稜を登って途中から北稜主稜にトラバースする。暖かい陽光に、午後からの天気の崩れなど気にならないくらいだ。

小さなコブのアタック、わずか三米ぐらいだが雪が柔かいので、全部落として、木のぼりである。雪のやや堅い部分はピッケルを交互にさして、それをホールドとして登る。

北稜はところどころ、左手側をまくようにして登る。暖かい陽光に南面の急なラッセルは重い。二つ三つ小さなコブを越し、コブの左手側をまきこむところが崩れそうなのでザイルをつける。

十一時、軽い食事。東尾根を下降して取りついた三人パーティに追いつかれる。私達のラッセルを利用してのぼって来たので、すごいピッチだ。食事のあいだに追いこしていった。

だがすぐ追いつく、大きな岩峰の下でもたもたしていた。左手側にまわりこんで、ルンゼをつきあげようとしたが、傾斜がきつくて崩れそうなのであきらめる。そのまゝの順序で結局右手にやや下りぎみにまわりこんで直上する。

雪壁の中から木をほりおこして木のぼりである。木のテッペンで雪庇を切る。

時間がかかる。約2時間半待つ。天候が崩れて、降雪となる。頭から雪をかぶりながら待つのはつらい。寒気にアイゼンをつけた足がいたい。樺の木にぶらさがりながら足ぶみである。掘りだした枯木の上に片足で立って雪稜へ移るところは、変に微妙なバランスである。

降雪の中、やせた雪稜、急なラッセル、又大きな岩峰だ。この岩峰の取りつきで先のパーティとトップをかわる。

ピッケルで雪をたたきおとしながら、掘り出したヤブをホールドに、アタックする。ザイル二十米、いっぱい伸し切つたところで、ジッヘルとなるが、やせた雪稜なので不確実だ。ラストに確実なジッヘルをたのみながら、トップの地点まで登る。トップは、そのまま登って、ジッヘルを確かにして、ラストをむかえる。トップの地点に全員が集まった時はもう暗い。キャップランプをつけたり、腹につめたりする。もうこの地点から、傾斜もおちるし、コブもない。だが、暗い雪の中の未知の世界は不安だった。

やがて、広いきつい斜面の岩の尾根らしいところへ出ると、冷尾根とのジャンクションだった。それをつげる、冷尾根隊の赤旗が、風にちぎれそうにまっていた。

予定の下降を考えるが、未知の崩れそうな雪壁のアップザイレンに非常に危険を感じる。2ピッチか、3ピッチか、ジッヘルポイントはどうか、夜間の、不安定な、ザイル下降に危険を感じる。コースは、種池小屋か、東尾根を下降し東尾根隊のベースキャンプに逃げることに決定する。午后七時は過ぎただろうか、県境稜線上の風をよけて、北峰直下で食べる。なんでも良く食べる方だが、頭脳パンだけはあまりたべたくない。

予想通り、県境稜線は、風が強い、主峰からの東尾根への下り口を過ぎないように、気をつけて、稜線ぞいにピークを確認しながら進む。爺ガ岳主峰着午后九時十五分、掘ってあった雪洞に風をさける。約三〇分の休息。

ピバーク、種池小屋へ逃げる、天候悪化を考えて、東尾根を下る。東尾根下降中、白沢天狗尾根とのジャンクションで、白沢天狗尾根へとルートを誤まる。

源汲への下り口の地点で、大町の灯をみてはっきりと誤まりを確認する、一月一日の午前二時半である。ツェルトをかぶり、アイゼンをとる。小さなガソリンストーブで氷をとりながら二時間〜三時間ばかり眠る。

一月一日(雨)

六時、ビショぬれのまま行動を起こす。九時、源汲着。トラックに便乗させてもらい鹿島の狩野宅に入る。

十時より十二時まで、土間のストーブのまわりにエアーマットをしいて死んだように眠る。午後も激しい雨のため、狩野宅に泊ることに決定

一月二日(曇り、雪)

五時、冷尾根のベースキャンプに向う。途中、東尾根隊とトランシーバによる連絡がとれ、無事を伝える。十時、無事ベースキャンプに到着する。冷尾根のアタック隊がまだ帰幕していないことを知らされる。あれこれ心配するうち、トランシーバが故障したので、東京農大パーティのトランシーバを借りて、通信すると無事を連絡してくる。

夜は、大いに飲み、かつ食べて話に花がさく。

一月三日(雪)

東尾根隊が全員で下山のサポートに来てくれる。十時、出発、午后一時鹿島の狩野宅着

エピローグ

強風・雪

寒気とともにしびれる様な感覚が全身をおそう。踏みしめるアイゼンにあえぎながら登る。動きの中にあるとき、激しさの中にあるとき、人間は山へ登る。過去の幻想が美しいものであろうと、人間は動物的な厳しさで生きている。雪が消えてカタクリが花をつけ、コブシの花の香る時、雪解の谷川の水を腹ばいになってのんだ。そんな想い出も、冷たい水の感覚も何故かよみがえってくる。きずだらけの栄光は動きつづける貧しき者だけのものだ。稜線のガスが切れ、又かくれた。人間は何も知らない。稜線の彼方になにも存在しない。存在するのは動きつづける人間だけだ。

高気圧はまだ分離しない。明日も又降るだろう、だが明日の存在を疑わない。現実を否定する奴は嘲笑しかできない。だが人間は可能性をどこまでも追求する

歴史がそれを実証しているように、止まることをやめないかぎり、自己の中から自己を媒介にするだけでなしに、自己の中の他者を媒介にして…。

悲しみは過去だけのもの、喜びは明日だけのもの、だが現実は自己の可能性だけのものだ。

暗い雪の尾根、自己が不定形の中にいる。人間にとって晴れた輝きの中にだけ生きていたことはない。それは常に不定形の中にいたのかも知れない。そうかも知れない。だが人間は登る。動的な可能性を求めて、厳しさの中にだけ、そうかも知れない。

何故ならすべてが不定形だ
人間は歩みつづける
過去は足跡としてしか残らない
エビのしっぽが一面についている
自然の芸術はその激しさと、厳しさにおいて動的に展開する。人間の呼吸がかき消される。トタンのヤツケが氷のほゝをこする人間の吐息はどこへいったのか。
岳の彼方になにがあろう
ここが頂き、暗やみと強風の中にただ立っているだけ…
だが、それが何んであろうと求めつづけた…
人間の可能性を求めることは、それか、まさに物質的必然の肯定ではないだろうか。

(大町山の会々員)

冷尾根よりの鹿島槍岳

雪山とマタギ

(2)

黒瀬広治

銃を扱うために、特に右手の人さしゆびを温っためていた。するとガンクラの〃かけ〃にタチをひいていた親方の息子の方で一発銃声がした。その音がして間も無く、手前のヒラをクマが横に切ってきた。血を吹き出しつつ、息づかい荒く駆けてくる。私の位置から二十間（三十六メートル）位のところまでくると急に頭を下の方へ向けた。私はこの時、止め矢を掛けなければならないと判断し、肩のつけ根を狙って撃った。手答えがあり、クマは下へころがっていった。私のタチからはクマがころがり込んだヒラが見えない。しかし、この様子を隣りのタチで見ていた親方が「先道(サキミチ)を切ノ」と大声で叫んでいる。クマがまだ止まらなくて、再び横に切っているのである。私は夢中で尾根を突走った尾根にはカゴがあるので注意しなければならない。だが、尾根の風上側は陽が当っているために、雪が柔い層と堅い層とが重なり合っていて、走りずらいので、仕方なく尾根を注意深く走った。チラチラと見えるクマは左右にヨタヨタしている。

頂上のカゴにさしかかったとき、クマの姿がハッキリ見えた。すっかり力を失ったクマがうずくまるようにしてあえいでいる。これ以上走られてはガンクラの真上にかかってしまい、その中へ落ち込めば面倒なことになると直感した。この位置で完全に止めたいと思った。十間（十八メートル）位下にいるクマを正確に狙うため、カゴの上へ少し出た。その瞬間足元がグラリとして、力がぬけたように感じた。自分の立っているところを中心に三間（五メートル）四方位が動き、初めはゆっくりと、次の瞬間は加速度的に落ち始めた。「シマッタ!!」カゴをぬいてしまったのだ。足場はもう力を加えてもそれを支えるほど安定していない。一方的に、下へ〳〵とすべり始めた。動きだしてから判ったことは、このヒラがガンクラの方へ向いていることである。急勾配のガンクラは草木が一本も生えていない。それほど急なのである。その上へ、カゴと一緒にすべり込もうとしているのである。体はすでに雪の中に深くはまっている。自分の体は次第に自由がきかなくて、雪の流れにまかせるのみである。

カゴがぬけたのがきっかけで、他の部分のカゴは塊となって次々と崩れている。それと同時にカゴの下側の雪も一斉にすべりだした。

一ケ所でカゴをぬいたのが原因で、伝播的になだれになったのである。すべり始めたとき手にしていた銃も、脳裏に浮ぶ子供の顔とどうしても自分は生きなければならないのだという強い気力のため、離してしまった。そして、〃なだれは泳げ〃というマタギの言葉通り、力いっぱい手足を動かしたのである。ともすると雪の流れの中へ沈んでしまいそうになる体を、全身を精いっぱい動かすことにより浮きあがるのである。そうしていてもどん〳〵下へ流されて、雪が加える圧力で次第に全身の感覚が薄れてくる。しかし、頭の中では〃泳ぐのだ〃とハッキリ意識していた。

ハク製のクマと筆者

身体がまるで水の上に浮び出したように、雪の上へ乗りあがったとき、上方から大きな雪の塊がスピードをもって迫ってきた。カゴのぬけたものである。これを見たときは、もう助からないと思った。だが幸にも塊は足につけていた和カンジキをはねとばしてころがっていった。そして、下の方に立っている大きなガンビ（シラカバ）の幹にぶつかったのである。

そのころ、大きな雪の流れは、ガンクラの下に林立するガンビの林まですべっていたのである。しかし、雪の中から首を出している私の体はグッと強い力で圧せられている。まるで真綿がからまりついたようにしめつけられてくる。圧力は上方から次第に強まっているのである。いくらあがいても、はい出ることができない。呼吸は困難となり、とても耐えられない。身体を前後左右に全身の力をふりしぼってゆすり、息を楽にするための空間をつくった。

雪は止まりつつあるのに今なおブッシュや低木の折れる音がしている。仲間が駆けつけるまでの三十分間ほどがとても長く、また頭はガン〳〵と割れるように痛むのである。自分は助かったのだと思うと妻子のことが再び頭に浮んできた。

一番初めに駆けつけてきたのは、セコを受け持った又吉であった。彼は「大丈夫か、大丈夫か?」とくり返している。私を勇気づけようとして、ピシャッ〳〵と頬を打つのである。彼の頬は涙でぬれていた。私が生きていたからである。彼は手で掘り出そうとしたが、堅く圧している雪ではとても仕事がはかどらない。私はあせり気味の彼に、ヘラを作って掘ってくれるように頼んだ。〃ほおの木〃を利用して、みる間にヘラを作った。そのうちに他の二人も駆けつけてきた。

雪から掘り出された私は、仲間の肩につかまって歩いた。和カンジキを失ったので、独りでは雪の中にうまってしまって歩けないのである。それに全身が綿をちぎったようにくた〳〵になり、力が入らないのである。

このままではとても村まで帰り着くことはできないので、一里（四キロ）程のところにある岩屋へ行くことにした。ここにはすでにマタギが用意した、たき木や米があるのである。急造のカンジキを準備して翌日山を降りることにした。

クマは雪にうずもれてしまい、全然判らなくなってしまった。後になって、自分の流された所に行ってみて、その長いことに驚いた実に三百メートル程も急斜面とガンクラをおし流されていたのである。

私は運よく助かったのであるが、妻の叔父二人が、同じような〃なだれ〃のために死んでいるのである。その話を聴くときは、常に〃なだれは泳げ〃と言われていたのである。これも雪山に生きるマタギの知恵なのである。

マタギはこれ以外に、雪山での狩猟という激しい行動を可能にするために、種々な技術を身につけている。そして、雪山という多くの落し穴を秘めた自然を深く研究しているのである。ここに述べたことは全く一例にすぎない。雪で白く輝くアルプス連山を眺めるにつけ、当時の雪山での数々の思い出が私の頭をかすめるのである。

☆文中において使用したマタギの用語は南部地方（岩手県）のマタギが使うものである

表紙説明

冷尾根より爺ガ岳　撮影　内田博文

山と博物館　第12巻第1号
一九六七年一月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL(大町)二二一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部